

<<日本慢性期医療協会>>  
**第9回経営対策講座 ～地上の輝く星を知る～**  
**プログラム** (予定)

1日目 <2026年8月22日(土)>

	内 容
13:20 ～ 13:30	<b>開会挨拶</b> <<総合司会>> 富家隆樹 日本慢性期医療協会 事務局長・研修委員会委員長 経営対策講座コーディネーター
講演1  13:30 ～ 14:30	<b>“壁”を壊して、地域と病院をつなぎなおす——ごちゃまぜの力で築く未来の医療経営</b> <b>講師：武久洋三（日本慢性期医療協会 名誉会長）</b> 「医療と福祉、病院と地域、若者と高齢者—その“壁”を壊せば、病院はもっと強く、地域はもっと温かくなる。」高齢者医療の第一人者であり、慢性期医療の旗手として常に時代を先駆けてきた武久洋三名誉会長が、今、医療と地域の未来を語ります。著書『地域ごちゃまぜ病院をつくろう』で提言されたのは、病院の“役割”そのものの再定義。医療と介護が分断された制度の狭間で疲弊する現場にこそ必要なのは、「ごちゃまぜ」になる勇気と構想力です。 “回復期や慢性期は「ゴミ箱」ではない” “病床稼働率ではなく、地域を救う発想を” “職員にも患者にも愛される病院を” これまでの常識を疑い、仕組みの限界を越えてきたからこそ語れる、現場目線かつ未来志向の経営論。その言葉一つひとつが、病院経営者の視野と胆力を広げてくれるはずです。 今こそ、「地域に必要とされる病院とは何か」を問い直すとき。 ごちゃまぜが、これからの病院の強みになる—
講演2  14:40 ～ 15:40	<b>医療経営のパラダイムシフト：内田病院に学ぶ「尊厳」と「地域共生」の生存戦略</b> <b>講師：田中志子（医療法人 大誠会 内田病院 理事長）</b> 日本の医療界が未曾有の構造的危機に直面する今、従来トップダウン型経営は限界を迎えています。本講演では、群馬県沼田市で「病院が安心して暮らせるまちをつくる」という壮大なビジョンを体現する、医療法人大誠会内田病院の革新的な実践を徹底解剖します。 内田病院の経営改善の本質は、二十年以上にわたり継続されている「身体拘束ゼロ」の取り組みに象徴されます。これは単なる倫理的選択ではなく、合併症の激減や診療報酬加算の最大化、さらには職員の自尊心向上による人材確保へと繋がる、極めて合理的な投資戦略です。また「刻み食ゼロ」を実現する口腔ケアや、多世代共生拠点「いきいき未来のもり」の運営など、病院を地域インフラとして再定義する手法は、これからの医療機関が進むべき道標となります。 さらに注目すべきは、隣接するヘルシーパーク「ソナタリュー」の展開です。天然温泉やレストラン、アスレチックを備えたこの施設は、病気や障害の有無にかかわらず、0歳から100歳までが「ごちゃまぜ」に交流する笑顔と体験のタウンです。医療の枠を超え、地域住民が楽しみながら健康になれる場を創出することが、結果として強固な地域ネットワークを築き、病院の持続可能性を確固たるものにしていきます。田中志子理事長が説く、患者・職員・住民すべての尊厳を守り抜く「善の循環」から、激動の時代を勝ち抜くための知恵を学びます。
講演3  15:50 ～ 16:50	<b>地域医療を支える情熱と統合ケアモデル - 宮地病院の挑戦と成果</b> <b>講師：宮地千尋（医療法人社団 明倫会 宮地病院 理事長）</b> 今、病院経営に求められるのは単なる収支改善ではなく、地域と共生する「組織の再定義」です。阪神・淡路大震災という未曾有の苦境を地域の声に支えられて乗り越え、「患者の幸せ、職員の幸せ」を軸に、明倫ヘルスケアグループは総力で“地域の医療・介護導線”を組み替えてきました。宮地病院で急性期～療養を受け止め、本山リハビリテーション病院で回復期・維持期リハを集中的に提供。さらに2024年に新築移転した老人保健施設「あずさ」を軸に、病院→リハ→老健→在宅を一体運用します。病院と施設を同じ経営言語で束ね直す—ここに次世代のハブ病院像があります。認知症患者医療センターの設立やケア手法「ユマニチュード」の導入といった先進的な認知症ケア、そして性別を問わず誰もが輝ける柔軟な職場づくりなど、その改革は多面にわたります。人口減少時代を生き抜くためのヒントと勇気を、現場で汗を流し続ける理事長自らが情熱的に語りかけます。自院の未来を切り拓く「進化」への鍵を、本講演でぜひ手に入れてください。
講演4  17:00 ～ 18:00	<b>99床で、有田市の医療を動かす。——健診7,000件超×透析×施設介護を束ねる地域独占モデル</b> <b>講師：成川暢彦（医療法人千徳会 桜ヶ丘病院 理事長）</b> 和歌山県有田市において、施設介護・健診事業・透析医療をほぼ一体で担う医療法人千徳会 桜ヶ丘病院。規模拡大ではなく、「地域で本当に必要とされる機能」を束ねることで、揺るぎない経営基盤を築いてきた病院です。 一般内科・腎臓内科を軸に、人工透析内科（腎センター）を地域の重要インフラとして高度化。さらに訪問看護ステーションや特別養護老人ホームなどの関連施設を展開し、医療・介護・生活を一本でつなぐ導線を構築しています。 特筆すべきは「治療で終わらせない」戦略。健診は年間7,000件超を実施し、上部内視鏡や胃がん発見率などの実績も積極的に公開。予防と早期発見を地域の信頼に変え、安定した外来基盤を確立しています。 本講演では、透析・高齢者医療・在宅・健診をどう組み合わせ、限られた資源で有田市の医療需要を事実上「束ねてきた」のか。院長自らの視点で、「地域独占ではなく地域最適を実現する経営の型」を学びます。
18:00～	懇親会（19:00終了予定）

2日目 <2026年8月23日(日)>

内 容	
講演 5 9:30 ~ 10:30	<p><b>仕組みで支える地域医療 - 品質と収支を両立する慢性期経営の実践モデル</b>                      講師：進藤 晃 (医療法人財団利定会 大久野病院 理事長)</p> <p>人手も財源も細る時代、慢性期病院の競争力は「長く診る」だけではなく、地域の課題を“事業”として引き受ける設計力です。大久野病院は、回復期 50 床・医療療養 50 床・介護領域 58 床のミックスに、外来・訪問看護・訪問リハ・居宅支援を重ね、国交省の短期入院協力病院として在宅介護者の“レスパイト”も支えています。さらに高次脳機能障害支援、認知症疾患医療センター、地域包括支援センターの受託、看護師の復職支援研修 (3 コース) まで地域の「困った」を担える仕組みを増やし、連携の接点を経営資源に変えてきました。著書『慢性期医療の品質マネジメント』で「2025 年度デミング賞日経品質管理文献賞」を受賞された進藤晃理事長が語るのは、QMS と PDCA で医療の質を“仕組み化”し、属人性を下げて現場と収支を同時に整える経営論。この講義で、稼働改善の意思決定、標準化・内部監査の回し方、在宅へつなぐ連携の実務まで、再現可能な実践法を持ち帰れます。</p>
講演 6 10:40 ~ 11:40	<p><b>“優しさ”を経営に変える——姫野病院が実践する、自律型組織と究極の患者体験戦略</b>                      講師：姫野亜紀裕 (医療法人 八女発心会 姫野病院 理事長)</p> <p>人手不足と収益悪化の時代に、なぜ姫野病院は選ばれ続けるのか。その答えは、「優しさ」を理念で終わらせず、仕組みとして徹底した経営にあります。18 平方メートルの広さを誇りながら差額室料を取らない全室個室。片道 2 時間でも厭わない外来患者の個別送迎。山間部の細い山道を走る、ストレッチャー付き病院救急車——。ここまでやるのか、という徹底した患者視点が、結果として外来数 160% 増を実現しました。さらに、フラットな組織、により、全職員が経営パートナーとして動く文化を構築。残業月 1.8 時間、出生率 2.12 という成果も両立しています。精神論ではなく、科学的な業務設計と IT 活用で「人を大切にすることが収益を生む」ことを証明した次世代モデルです。「人を大切にすることは甘さではない。最強の戦略である」。閉塞感を打ち破るヒントを、理事長自ら語ります。</p>
11:40 ~ 12:20	<p><b>昼食休憩</b></p>
講演 7 12:20 ~ 13:20	<p><b>iPhone × DX × AI——人と技術で未来を拓く、HITO 病院の経営改革</b>                      講師：石川賀代 (社会医療法人石川記念会 HITO 病院 理事長)</p> <p>人手不足と医師減少という厳しい現実の中、HITO 病院は“持続可能な医療”を目指し、データドリブンで人を真ん中にしたサービスの提供を軸に DX による業務改革に踏み出しました。全職員に iPhone を配布し、チャット活用で連携強化。看護師の残業は年間 6,000 時間削減、新人の離職はゼロ。生成 AI やスマートベッド管理も導入し、医療の質と経営の安定を両立しています。本講演では、現場に根差した実践とその効果を、理事長自らが具体的に紹介します。変革のヒントがここにあります。</p>
講演 8 13:30 ~ 14:30	<p><b>「尊厳の保持」と「経済性」を統合する、城東病院の挑戦</b>                      講師：佐藤仁美 (医療法人 慶友会 城東病院 院長)</p> <p>2040 年問題という未曾有の危機を前に、病院経営は今、単なる「病態管理」から「人生を支えるモデル」への変革を迫られています。本講演では、山梨県・城東病院の佐藤仁美院長が実践する、質の高いケアを収益に直結させる画期的な経営戦略を解き明かします。本講演では、まず「身体拘束ゼロ」を単なる倫理的目標ではなく、最強の経営戦略として捉え直します。拘束を廃止する高度なケアスキルは、合併症の抑制や在宅復帰率の向上をもたらし、結果として医業収益の改善とスタッフの離職防止を同時に実現します。また、人材をコストではなく資本と捉える「スリーアップ推進宣言」に注目します。職員のスキル向上を収益増につなげ、それを賃金として還元する「善の循環」こそが、組織の底力を引き出す鍵となります。さらに、急性期の知見を活かしつつ、地域住民の人生に寄り添う「コミュニティホスピタル」へのパラダイムシフトについても詳述。赤字危機をも乗り越えた「揺るぎないビジョン経営」の真髓をお伝えします。</p>